
霧が晴れない

○

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
霧が晴れない

【Nコード】
N1391C

【作者名】
○

【あらすじ】
どこかに迷いこんだ一人の人間。どこかにまた迷いこむ。

私は書斎で椅子に深々と体を沈め、日本について思考をめぐらせる。

これまでの日本は島国だった。だが、これからの日本は島というカテゴリーから脱却し、鳥になるのだ。そう、あの空を飛ぶ鳥のことだ。

私は、どうすれば空を飛べるようになるのか長年考えてきた。今までさまざまなアイデアが生まれ、消えていった。そしてついに私はその方法をこの手に掴み、引きちぎった。その方法とはいったいなんだったのだろうか、もう思い出せない。

つい先程まで、私はカシオペア座から受けた極秘指令を実行するべく、救援を求めて自衛隊に無言電話をかけていた。そのときの私はまるで、生まれたての子馬のように震えていた。

しかし、私は電話番号を間違えていることに気付いたのだ。これでは救援は来ない。なんということだ、このままでは私は始末されることになる。

そこで私はパートナーである世界ミドル級チャンピオンの静夫に相談した。しかし彼は私の問いかけに何の反応もせず、両足をテーブルに投げ出して重苦しい沈黙を守ったままだった。

返事をしない事にかつとなった私は静夫に火をつけた。ぱつと燃え上がると思っていたが、くすぶるばかりで中々火がつかない。私は油をかけたり、ワンピースやスカートを上に乗せたりしてよく燃えるよう努力した。

努力の甲斐あって、彼はそのまま燃え尽きてしまった。後に残されたのは、彼の骨と燃え残った靴だけ……私はこれらを使ってこの窮地から脱出しなくてはならない。

とりあえず私は彼の骨をポケットにいれて靴を頭に乗せた。変装のつもりだったがまるで意味が無い。

何かおかしい、そう気付いた私は靴を足にはいてみた。異様に歩きづらい。これでは奴等から逃げる事が出来ない。こうしている間にも奴等は近づいてきているはずだ。何とかしなければならぬ。そのときだった、私の頭に起死回生の一手がひらめいたのだ。この靴は足にはくものではなく、投げて武器にすればいいのだ、と。さっそく私は靴を放り投げてみたが、靴は窓の向こうに消えていった。

落ち着いて考えてみると敵はまだいなかった。

どうやら私は更なる窮地に追い込まれてしまったようだ。

もはや残された時間もそう多くはないだろう、私は急いで逃げることにした。玄関へと向かう途中、ふと鏡が目に入った。せめて変装ぐらいはしておこう、そう思った私は洗面所に行くことにした。

洗面所を開いて洗顔フォームをとりだして顔を洗う。しかし妙に泡立ちが悪い。おかしいと思った私は、痛む目を開いてチューブをよく見てみた。するとそこには「ねりわさび」という文字があった。道理で痛いはずだ。

とりあえず顔は洗った、さてどう変装しようかと考えた時、床に口紅が転がっているのを見つけた。そういえば、静夫がいつも使っていた化粧品があったはずだ、あれを使えばいい。

化粧品一式を静夫のバッグから取り出した私は、さっそく変装に取り掛かった。

化粧品を前に幼い日の禁じられた思いがよみがえる。

「私は女の子になれる……はずよ」

なれなかったが、とりあえず変装は完了した。後は奴等に気付かれないように逃げるだけだ。

私は用心深くドアを開け、トイレに入った。よく考えたらここは玄関ではなかった。

「あせってはいけない」そう自分に言い聞かせて玄関に向かう。その行く手に大きなバナナが落ちていた。

誰かの仕掛けた罠だろうか？　だがこの程度では私を止めること

は出来ない。

「なめるな！」

私は渾身の力をこめてバナナを踏んづけた。すると天地が逆転し、私はそのまま後頭部から床へと落ちた。

気が付くと廊下は私の流した血で赤く染まってしまっていた。

しばらく床でうめいた後、私は痛む頭をさすりながら玄関に向かう。その途中、私の脳裏にはここでの思い出が走馬灯のように流れていた。

「ここにきたのは……いつだっただろう」

「ここは……どこだっただろう」

「私は……誰だ？」

幸いな事に、記憶喪失は一時的なものだったらしくすぐに回復した。私は急いで玄関に向かう。

玄関で私は、まずフライパンに油を引き、コンロに火をつけた。肉の焼ける香ばしい臭いが鼻腔をくすぐる。だが今は空腹ではない、むしろ満腹だ。私はフライパンごとゴミ箱に放り込んだ。

満足した私は玄関のドアを開けて書斎に足を踏み入れた。

シャワーの栓をひねり熱いお湯を浴びる。私の体についた汚れがお湯に流され落ちていく。床では静夫が水に濡れながら世界チャンピオンの名にふさわしい表情で横たわっていた。これで手足があらばすぐにでもトップに返り咲けるだろう。

さっぱりした私は全身から雫を垂らしながら玄関に向かって歩き出した。

早くここから逃げなければならない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1391c/>

霧が晴れない

2010年10月10日06時46分発行